

『テーベ物語』の服喪の嘆き (planctus) における 死者への呼びかけ

高 名 康 文

1150年頃に北フランスで成立したとされている『テーベ物語』は、エディプス王の二人の息子エティオクレスとポリニセスの相続争いに端を発するテーベの滅亡を題材とした作品である。当時のオイル語圏では、キリスト教徒にとっては異教世界である古代に題材をとりながら、登場人物を騎士に置きかえて描く作品が3つ書かれた。これらは今日の文学史では「古代物語」と呼ばれているが、『テーベ物語』は、他の『エネアス物語』『トロイ物語』に先駆けて現れたものであるとされている。「物語」と訳されるromanは、古フランス語では「俗語で書かれた物語」という意味であるが、「古代物語」は、古代人がラテン語で書いた原典を俗語に翻案したものである。『テーベ物語』は、スタチウスの『テバイッド』を原典としており、エディプス伝説を知らない聴衆への補足のためか、冒頭には原典にはないエディプス王の誕生から没落までのエピソードが継ぎ足されている。

文学史の上で重要なのは、この後フランスの語りものにおいて主流となる八音綴平韻が『テーベ物語』によっていち早く取り入れられていることで、それまでの語りもので主流だった聖人伝や武勲詩のような「歌」(chant)が持っていた十音綴詩句が半諧音によって詩節をなすという形式とは断裂をなしていることである。

この作品を完全な形で収めている写本は現在5つ残されているが、近年の研究によれば、本論で主にとりあげるC写本は、それらの中で最もオリジナルに近い形を持っているとされている¹。これを校訂したG. レイノー・ド・ラージュ版のテキストは、全体で10562行であるが、その約半分(4511行から9856行)には、ポリニセスのために戦うアルゴス王アドラストゥスの軍隊によるテーベの包囲戦が、アルゴス側に肩入れした形で描かれている。そこでは、アルゴス側の神官アンフィアラスを皮切りに、ポリニセスの親友のティデウス、パルトノペウス、カパネウス、テーベ軍のアトンといった戦士の死が次々

と描かれ、エディプス王の息子たちの相打ちによって戦いが終わる。アルゴス側で生き残るのはアドラストゥス王と二人の臣下のみである。

様々な中心人物が次々と死んでいくという展開の中で、死者を悼む人々の描写や台詞が現れる。それらは、作者による独創というよりはむしろ、『聖アレクシス伝』以来の俗語文学、恐らくはそれよりも古い口承の儀式的伝統に根ざした表現によって描かれている。このような伝統的な嘆きの表現は「プランクトゥス」(ラテン語 planctus)と呼ばれており、様々な定型的なモチーフによって構成されている。そういったモチーフの一つに嘆きの台詞の中の「死者への呼びかけ」がある。本論は、このモチーフ及びにこれに関連するモチーフを統計的に分析することで、『テーベ物語』において嘆きの台詞が持つ特徴を指摘することを目的とする。まず、オリジナルに近いとされるC写本に現れる「呼びかけ」と『ロランの歌』におけるそれを比較することで、八音綴平韻の「物語」が成立するにあたって、それまで流行していた「歌」との間にどのような違いが生じたかを指摘する。さらに、C写本よりは時代が下ってから成立したとされるP写本に見られる「加筆」の一部をC写本のテキストと比較することによって、「物語」が流行するに伴って、問題とするモチーフの現れ方にどのような変化が生じているかを観察することにする。

プランクトゥスにおける「死者への呼びかけ」

北フランスの俗語文学におけるプランクトゥスの形態論的分析には、P. ズムツールによる二本の先行研究が特に重要である。1957年に発表された『『ロランの歌』所収のプランクトゥスについての類型論的研究』²においては、オックスフォード版『ロランの歌』の第206詩節(laisse)から始まる5つの詩節でロランの遺体を前

¹ 『テーベ物語』C写本とは、パリのフランス国立図書館所蔵の fr. 784, fol. 1-67a のこと。本論では、これの校訂本 *Le Roman de Thèbes*, éd. G. Raynaud de Lage, 2 vols., Paris : Champion 1968 を使用している。テキストの伝承についての議論は、本論の脚注28を参照のこと。なお、2008年発行の *Le Roman de Thèbes. Edition bilingue. Publication, traduction, présentation et notes par Aimé Petit*, Paris : Champion は本論執筆時は参照できなかった。

² P. Zumthor, « Etude typologique des planctus contenus dans la *Chanson de Roland* », in *La technique littéraire des chansons de geste : colloque international tenu à l'Université de Liège du 4 au 6 septembre 1957*, Paris : Les belles lettres, 1959, pp. 219-235.

にしたシャルルマーニュの嘆きを分析して、10個ほどのモチーフが繰り返し使われていることが指摘されている³。「死者への呼びかけ」は、そのうち「つなぎの語り」⁴について二番目に挙げられているものである。P. ズムトールは、これら2つのモチーフのみが『ロランの歌』中の6つのプラントゥスの全てに現れることを指摘して、他に挙げたモチーフと比べて情感に乏しいこれらは、当該箇所がプラントゥスであることを示す形式的な標識として機能しているのだと説明している⁵。すなわち、物語の語り手による「つなぎの語り」はプラントゥスの始まりの合図であり、「死者への呼びかけ」は登場人物による嘆きの台詞が始まったという合図として機能しているというわけである。

「呼びかけ」(フランス語 *apostrophe*) は、修辞学で言えば「頓呼法」(フランス語 *apostrophe*, ラテン語 *apostropha, exclamatio*) と訳されているものである。古代の雄弁術教師たちによれば、法廷において判事から顔をそむけて係争相手に直接語りかける技術のことを言った。これが、コルニフィキウス (Cornificius) の詩学において、何らかの人、町、場所、ものに呼びかけることで悲しみや憤りの表現を強める技術として記述された。さらに、中世の詩論においては感情の強度を高める手段というよりは、ディスクールを長く広く展開する技術 (フランス語 *amplification*) の一つとして位置づけられるようになった⁶。そのような詩学書の一つであるジョフロワ・ド・ヴァンソフ (Geoffroy de Vinsauf) の「新詩学 (Poetria nova)」一時代は本論で扱う『ロランの歌』や『テーベ物語』より下る一は、「頓呼法」について説明する際に文例としてイングランドのリチャード獅子心王の死を巡るプラントゥスを紹介しており、この文彩が中世の詩学においてプラントゥスと強く結

び付けられていたことが伺える⁷。ただし、このラテン語の模範文には、王を失ったイングランド、王が致命傷を負った日、王に矢で傷を負わせた者、擬人化された死、王を造形した自然、神への呼びかけを含んでいるが、死者への呼びかけは含まれていない。人の死を悼む言説において、死者に呼びかけて冥福を祈ったり、生前の業績を称えたりするのは当たり前であるので、これそのものは言説を長く伸ばすためには役に立たないという判断があったものと考えられる。ところが、P. ズムトールの分析した『ロランの歌』で見られる死者以外への呼びかけといえ、シャルルマーニュによるロランの死を悼む台詞の中に、擬人化されたフランスへの呼びかけ (v. 2928) と祈りのモチーフと結びついた神への呼びかけ (v. 2939) が一例ずつあるのみである⁸。また、『テーベ物語』にも、本論で主に扱うC写本が提示するテキストには死者以外への呼びかけはほとんどない⁹。故に、本論では中世のレトリックとの結び付きについての指摘はここまでにとどめ、俗語文学の枠組みの中で「死者への呼びかけ」のモチーフについて考察していくものとする。

コーパスについて

まず、本論で我々が『テーベ物語』C写本のプラントゥスと呼ぶべきものを明らかにしなくてはならない。『ロランの歌』についてのプラントゥスの研究で、P. ズムトールはこれを次のように定義している。

ここで私がプラントゥスと呼ぶのは、戦友の亡骸を前にして登場人物が感じている苦痛を表現する武勲詩の一節である¹⁰。

³ そのうち、1963年に発表されたP. Zumthor, « Les *planctus* épiques », *Romania*, 84 (1963) でとりあげて、比較的初期の武勲詩から採られたのは、次の10のモチーフである。①「つなぎの語り」(lien narratif), ②「死者への呼びかけ」(apostrophe), ③「祈り」(prière), ④「死者の賞賛」(éloge du défunt), ⑤「悲しみの外面的なしるし」(signes extérieurs de la douleur), ⑥「内面の悲しみ」(douleur intérieure), ⑦「遠い祖国への言及」(allusion à la patrie lointaine), ⑧「『今いざこ』のトポス」(le « topos » de *ubi est*), ⑨「現状の想起」(évoocation de la situation présente), ⑩「『(死者の美徳が) 仇になってしまった』という詠嘆」(le motif de *mare fustes*)

⁴ P. ズムトールによる「つなぎの語り」とは、「(先行する詩節で登場した) 遺体を見て、」という語りか「(死者を) 惜しむ」という語りか詩節の冒頭に置かれて、これから嘆きが始まることの予告となっていることを指す。

⁵ P. Zumthor, « Etude typologique des *planctus*... », p. 224.

⁶ E. Faral, *Les arts poétiques du XII^e et du XIII^e siècle*, Paris, Champion, 1924, pp. 70-72 を参照。

⁷ *ibid.*, pp. 208-210. (Geoffroy de Vinsauf, « Poetria nova », vv. 367-430) C. Thiry, *La plainte funèbre*, Turnhout : Brepols, 1978, pp. 24-27 のコメントも参照。

⁸ 本論で『ロランの歌』について述べる際は、*La Chanson de Roland*, éd. C. Segre, Genève : Droz, 2003 を定本とする。

⁹ v. 6089 には擬人化された死への呼びかけ (Ha ! Mors, com tu es poostive !) があるものの、それに先立つ vv. 6086-6088 ではウジ虫が死体を喰らうであろうという死体腐乱のイメージから世の無常を嘆く文がある。このモチーフは中世後期に盛りを迎えるものであり、時代が下ってからの加筆の可能性がある。本論では考察の対象にはしない。なお、近年の研究ではC写本より年代が下った状態を反映しているとされるA写本P写本はこの部分を含まず、別のテキストが置かれている。以上の記述については、ホイジンガ『中世の秋』、堀米庸三訳、中央公論社、1979年の第11章「死のイメージ」及びに *Le Roman de Thèbes publié d'après tous les manuscrits*, éd. L. Constans, 2 vols, Paris : Firman Didot (Société des anciens textes français), 1890のvv. 6393-6416の注 (t. 1, p. 312) とそのヴァリエント (t. 2, pp. 181, 182, p. 271) を参照。

¹⁰ P. Zumthor, « Etude typologique des *planctus*... », p. 219 : « J'appelle ici *planctus* un passage d'une chanson de geste, exprimant la douleur ressentie par un personnage en présence du cadavre d'un compagnon d'armes. »

これに従って、彼は自分の研究のコーパスからvv. 3717-3721において婚約者ロランの死を聞いてオードが嘆き、死ぬ場面を外している。しかし、これはコーパスの均一性を高めるための措置であって、死者や嘆き手の身分や性別、嘆き手のいる場所は本来プランクトゥスの定義には関わりがない。このため、本論では、登場人物がある人物の死について嘆く場面の全てを考察の対象とすることにする。一方、プランクトゥスは、抒情的であることをその本質とするので、嘆きという静的な状況に加えて、何らかの行為が書き込まれている場面は排除して考えるものとする。例えば、臨終や葬送行列や葬儀や埋葬といった場面は、死にまつわる宗教的な儀式という側面を色濃く持つことを考慮して対象から外す。以上のような考えに基づいて我々が提示する『テーベ物語』C写本におけるプランクトゥスのコーパスは次の通りである。

*I 父親の命令で臣下に殺されようとするエディプス (vv. 53-80)

{*I-1 ジョカストの嘆き (vv. 53-80)}¹¹

II ライウス王の死 (vv. 245-262)

{II-1 テーベの人々の嘆き (vv. 245-254), II-2 ジョカストの嘆き (vv. 255-262)}

III ティデウスに殺された50人の騎士 (vv. 1957-1998)

{III-1 テーベの人々の嘆き (vv. 1957-1998)}

IV リギルジュ王の王子の死 (vv. 2387-2422, 2505-2562)

{IV-1 イジフィール (子守女) の嘆き (vv. 2387-2422), IV-2 リギルジュ王の嘆き 1 (vv. 2505-2518), IV-3 王妃の嘆き 1 (vv. 2519-2527), IV-4 リギルジュ王の臣下たちの嘆き (vv. 2528-2538), IV-5 リギルジュ王の嘆き 2 (vv. 2539-2542), IV-6 王妃の嘆き 2 (vv. 2543-2562)}

V アンフィアラスの死 (vv. 5107-5150)

{V-1 アドゥラストゥス王の嘆き (vv. 5107-5120), V-2 アルゴス軍の嘆き (vv. 5121-5150)}

VI アトンの死 (vv. 5831-5836, 5849-5852, 5909-5928, 5947-6136)¹²

{*VI-1 ティデウスの嘆き (vv. 5831-5836, 5849-5852), *VI-2 町の人々の嘆き (vv. 5909-5914), *VI-3 イスメーンの嘆き 1 (vv. 5915-5928), VI-4 集団による嘆き 1 (vv. 5947-5952), VI-5 イスメーンの嘆き 2 (vv. 5953-5966), VI-6 アドゥラストゥス王の

嘆き (vv. 5967-5986), VI-7 集団による嘆き 2 (vv. 5987-5992), VI-8 アトンの臣下の嘆き (vv. 5993-6050), VI-9 イスメーンの嘆き 3 (vv. 6051-6136)}

VII ティデウスの死 (vv. 6399-6496, 6785-6802)¹³

{VII-1 アドゥラストゥス王の嘆き 1 (vv. 6399-6408), VII-2 ポリニセスの嘆き (vv. 6409-6496), VII-3 ティデウスの家臣の嘆き (vv. 6785-6796), VII-4 アドゥラストゥス王の嘆き 2 (vv. 6797-6802)}

VIII パルトノペウスの死 (vv. 8833-8862)

{VIII-1 家臣ディルセウスの嘆き 1 (vv. 8833-8836), VIII-2 敵将エティオクレス王の嘆き 1 (vv. 8837-8838), VIII-3 家臣ディルセウスの嘆き 2 (vv. 8839-8845), VIII-4 エティオクレス王の嘆き 2 (vv. 8846-8848), VIII-5 敵であるテーベの兵士たちの嘆き (vv. 8849-8852), VIII-6 エティオクレス王の嘆き 3 (vv. 8853-8862)}

IX カパネウスの死 (vv. 9631-9648)

{IX-1 アドゥラストゥス王の嘆き (vv. 9631-9648)}

X ポリニセスの死とアルゴス軍の壊滅 (vv. 9871-9886, 9917-9922)

{X-1 アルゴス軍の壊滅の知らせを聞いて嘆くギリシャの女たち (vv. 9871-9886), X-2 夫 (ポリニセスとティデウス) の死を聞いて嘆くアドゥラストゥス王の娘たち (vv. 9917-9922)}

このうち I では、ライウス王がエディプスを殺すように命じただけで、嘆きの対象のエディプスは死んでいない。また、VI のアトンの死についても、場面の前半でアトンは瀕死の状態にあっても、まだ死んでいるわけではない。しかし、これらには、本論で論じる台詞中の死者への呼びかけの他、例えば*I-1では、本論で論じる「死者への呼びかけ」の他に、

La mere pleure, crie et bret,
ses poinz detort, ses chevex tret ;
pasmee chiet sor son enfant
et demeine doulor mout grant : (*Le Roman de Thèbes*, vv. 53-56)

(訳 母親は泣き、叫び、喚き、こぶしを捻り、自分の髪を引っ張り、気を失って子供の上に倒れます。とても大きな悲しみに身を任せます。)

¹¹ 一行目には嘆きの対象となる人物を記し、次行以下の{|}内には嘆いている人物を順次示すものとする。なお、ローマ数字の前に付した「*」は、嘆きの対象が実際には死んでいないことを意味している。

¹² vv. 5837-5848 はアトンのティデウスに対する返事、vv. 5853-5908 は重体のアトンを城中に搬送する場面、vv. 5929-5947 はアトンの臨終の場面なので除外する。

¹³ vv. 6497-6784 には、テーベ軍がティデウスの遺体を奪って遺体に乱暴狼藉を働く様が描かれている。喪の悲しみの描写よりは物語の展開に比重が置かれていると判断して考察の対象から外すが、vv. 6701-6717 のアルゴス人の捕虜がテーベ軍に命じられて、アルゴス軍の大將イボメドンに悲しんでいるふりをして近づいて騙すという一節、vv. 6751-6774 のティデウスの遺体への乱暴狼藉を見てアルゴス勢が嘆くという一節にはプランクトゥスでよく見られる表現が多く見られる。

における「泣く」、「叫ぶ」、「喚く」、「こぶしを捻る」、「自分の髪を引っばる」、「気を失って倒れる」といった、この作品やこの他の作品のプランクトゥスに類出する定型的な表現を含んでいることから、我々は*印をつけて他の場面とは区別した上で考察の対象とすることにす¹⁴。

「死者への呼びかけ」について

『ロランの歌』では、あらゆるプランクトゥスにおいて登場人物の台詞があり、その中で死者への呼びかけがなされている。これに対して『テーベ物語』においては、登場人物による台詞が存在せず、嘆く様子の描写だけで成り立っているプランクトゥスが存在する。我々が上に

整理した10の死を巡る場面のうち、III（ティデウスに殺されたテーベの騎士50人をテーベの人々が悼む場面）、V（アンフィアラスの死を巡るアルゴス勢の嘆き）、X（アルゴスとテーベの両軍がほぼ全滅した後に、国に残っていた女たちがアルゴス勢の戦士を悼む場面）の3つがそれに当てはまる。

とはいえ、残りのケースについて検討すると、喪の場面において台詞が占める重要性が下がったというわけではないことが理解されよう。表1に示す通り、嘆きの場面全体の40.9%は登場人物の台詞で成り立っている。その中には、VI（嘆きの対象はアトン）において婚約者を悼むイスメヌ、VII（ティデウス）において、祖国を出て以来の盟友を悼むポリニセスの台詞のように、60行前後となる長口上も存在する。

表 1

番号 (嘆きの対象) 話者 (番号)	プランクトゥ スの長さ (行)	台詞の長さ (行)	プランクトゥ ス中、台詞が 占める割合	死者への呼び かけ (回)
*I (*エディプス) ジョカスト (*I-1)	計 28	計 22 22	計 78.6% 78.6%	計 4 4
II (ライウス王) ジョカスト (II-2)	計 18	計 5 5	計 27.8% 27.8%	計 0 0
III (50 人の騎士)	計 42	計 0	0%	計 0
IV (王子) イジフィール (IV-1) リギュルジュ王 (IV-2, 5) 王妃 (IV-6)	計 81	計 41 26 9 6	計 50.6% 32.1% 11.1% 7.4%	計 6 4 0 2
V (アンフィアラス)	計 44	計 0	0%	計 0
VI (アトン) ティデウス (*VI-1) アトンの臣下 (VI-8) イスメヌ (VI-9)	計 220	計 106 4 40 62	計 48.2% 1.8% 18.2% 28.2%	計 10 0 5 5
VII (ティデウス) ポリニセス (VII-2)	計 116	計 59 59	計 50.9% 50.9%	計 1 1
VIII (バルトノベウス) エティオクレス王 (VIII-6)	計 30	計 9 9	計 30% 30%	計 0 0
IX (カパネウス) アドラストゥス王 (IX-1)	計 18	計 11 11	計 61.1% 61.1%	計 0 0
X (アルゴス軍)	計 22	計 0	0%	計 0
合 計	619	253	40.9%	21

¹⁴ これらの表現はいずれも、P. Zumthor, « Les *planctus* épiques », pp. 66, 67 で「悲しみの外部への表出」のモチーフとして採録されている。また、拙稿『『狐物語』とクレチアン・ド・トロワにおける喪の嘆き』、福岡大学人文論叢 39 (2008), pp. 1081-1121 の pp. 1096-1109 では、クレチアン・ド・トロワの物語作品におけるこれらのモチーフのあらわれを採録している。

また、表1からは、嘆きの台詞を述べる話者の中に多くの女性がいることが見て取れる。女性の嘆き手が現れる *I (エディプス), II (ライウス王), IV (王子), VI (アトン) 一かっこ内は嘆きの対象を表す—について言えば、Iの78.6%が母ジョカストの台詞に、IIの27.8%が妻ジョカストの台詞に、IVの32.1%がイジフィール、7.4%が母親の王妃の台詞に、VIの28.2%が恋人のイスメーンの台詞に (ティデウスの台詞には1.8%, 男性の集団であるアトンの臣下の台詞には18.2%) 占められている。嘆き手に死者の母親や妻や恋人が登場するプランクトゥスでは、そういった女性の台詞が大きな位置を占めるという傾向が認められる。『ロランの歌』におけるプランクトゥスの大半が戦場における男の戦友によるもので成り立っていることを考えれば、随分と大きな変化である。12世紀フランスの俗語文学において、女性が物語の舞台の前面に出てくる様子を我々は観察しているのである。

次に、「死者への呼びかけ」のモチーフの出現状況について観察しよう。注目すべきは、このモチーフの出現回数¹⁵と台詞の長さの総体の割合を、男性による台詞、女性による台詞に分類すると、呼びかけの出現の割合に著しい違いがあることである。女性の台詞の中では死者への呼びかけが多用される (*I-1, IV-1, IV-6, VI-9) 一方で、男性の台詞には個人によるものが一例 (VII-2), 戦士による集団的ディスクール¹⁶に一例 (VI-1) 存在するのみである。このことを統計的にまとめたのが表2である。

表3

出現箇所	嘆き手	死者への呼びかけ
v. 64 (*I-1)	ジョカスト	petiz enfes, ...
v. 67 (*I-1)	ジョカスト	douce rien,
v. 71 (*I-1)	ジョカスト	..., filz, ...
v. 74 (*I-1)	ジョカスト	biax tres chier filz, ...
v. 2417 (IV-1)	イジフィール	Enfes, petite creature, clere face, tendre feture,
v. 2547 (IV-6)	王妃	He ! petit enfes, tendre bouche,
v. 6009 (VI-8)	アトンの臣下	« Athes, sire, bele jouvente, bele chiere, franche, rovente, biau douz sires,...
v. 6073 (VI-9)	イスメーン	« Athes ! biau sire,...
v. 6079 (VI-9)	イスメーン	..., Athes,...
v. 6083 (VI-9)	イスメーン	..., Athes,...
v. 6109 (VI-9)	イスメーン	Biau sire chiers,...
v. 6429 (VII-2)	ポリニセス	Compainz,...

¹⁵ G. レイノー・ド・ラージュの校訂による句読点を基準に勘定している。例えば、v. 6009の « Athes, sire, bele jouvente, » は3回、v. 6010の « bele chiere, franche, rovente, » は3回としている。

¹⁶ 武勲詩において特徴的な現象に、様々な折に、個別化されない人々で構成される一団の台詞が現れて群集の声を伝えるということがある。この集団的ディスクールがクレチアン・ド・トロワの物語でいかに継承されているかについては、A. Micha, « Le discours collectif dans l'épopée et dans le roman », in *Mélanges de langue et de littérature du Moyen Age et de la Renaissance offerts à Jean Frappier*, t. 2, Droz, 1970, pp. 811-821, 古代物語でのあり様を巡っては、A. Petit, *Naissances du roman. Les techniques littéraires dans les romans antiques du XI^e siècle*, 2 vols., Atelier national de reproduction des thèses de Lille III, 1985, t. 1, pp. 553-565 を参照。

表2

	台詞の長さ (行)	呼びかけ (回)	台詞の長さ ／呼びかけ
男性による台詞 (うち、集団的台詞)	132 (40)	6 (5)	22 (8)
女性による台詞	121	15	8.1
全 体	253	21	12

女性による台詞の中では8.1行に一回死者、あるいは死の危機に瀕する者への呼びかけがなされているのに対して、男性の台詞の中では22行に一回と頻度において2倍以上の違いがあることが分かる。さらに、男性の台詞を個人として描かれている登場人物のものに絞って述べると、全92行のうち、ティデウスの死を巡るポリニセスの嘆きの中に「友よ、(Compainz,)」(v. 6429) という呼びかけが一例見出されるのみである。女性による嘆きの台詞は集団的な嘆きを含んでいないことを付け加えれば、この物語のプランクトゥスにおいては、死者への呼びかけの多い少ないが女性的な台詞と男性的な台詞をそれぞれ特徴づけていることが理解される。P. ズムトールの研究が示しているように、男性が登場人物の大部分を占める武勲詩において、死者への呼びかけが頻繁になされていたことを思い起こせば、ここには大きな変化が認められるといえる。

表3は『テーベ物語』中の「死者への呼びかけ」を全て挙げたものである。女性による嘆きのうち、*I-1とIV-6は母による嘆き、IV-1は子守女のイジフィールによる嘆きであるが、嘆きの対象を表す*enfant, rien, fil, criature*といった名詞に*douz, petit, tendre*といった形容詞が付加されて、子供への愛情の深さを語る表現になっている¹⁷。さらに、VI-9の婚約者アトンを失ったイスメヌの台詞も含めて、女性による呼びかけには、連続して出現していたり、台詞の中のほど近い場所で何回も繰り返されていたりするという特徴がある。対して、男性の台詞においては、このような繰り返しはVI-8のような集団による台詞には見出されるが、個人としての男性の台詞には、上に述べた通り、そもそも死者への呼びかけ自体がプランクトゥス全体で92行中に一回しか見いだせない¹⁸。

女性による嘆きの台詞の中で死者への呼びかけが繰り返されるとい現象は、実は『聖アレクシス伝』の中にも見出されるので、フランスにおける俗語文学の始まりからある現象である¹⁹。『テーベ物語』C写本に見られるプランクトゥスは、このような伝統を踏襲する一方で、男性の台詞においては、先行作品では台詞を含む各詩節の中でほぼ必ず一回はなされていた死者への呼びかけを極端に少なくしているといことができる。

「私」への呼びかけと、「私」の状況を感嘆して述べる形容詞文

*I (*エディプス) でエディプスの母ジョカストは、嘆きの台詞の初めに、自らの境遇を悲しんで、

« Lasse, dolente, que ferai ?
Doulereuse, que devendrai ?
Chetive riens, por quoi nasquis ?
Pecheresse, por coi vesquis
n'omicide comment seré
de mon enfant que je porté ? (*Le Roman de Thèbes*, vv. 57-62)

(訳 不幸なことです、悲しい、どうしましょうか？ 苦しい、私はどうなるのでしょうか？ 惨めなものよ、どうして生まれたのでしょうか？ 罪びとよ、どうして生きているの？ 自分が生んだ子を殺すなど、どうすればできるのでしょうか？)

と述べている。ここでジョカスト自身への問いかけの中で使われている"chétive riens", "pecheresse"といった名詞(句)は、修辭的に二人称に仮託した「私」への呼びかけであり、いわば「私」への呼びかけとでも名づけられるもので、同じ台詞中にある"petiz enfes", "douce rien", "filz", "biax tres chier filz"といった息子への呼びかけと対をなすものである。このような呼びかけによって、話者は自分自身を「惨めなもの」「罪人」と規定しているのであるが、"chétive riens"や"pecheresse"で示される罪と、子供への呼びかけ"petiz enfes"に含意される無実性の間に鏡の関係があることは明らかである²⁰。

引用部でこれに先立って置かれている"lasse", "dolente", "doulereuse"といった語もまた「私」に関わるものである。これらは、この校定本での句読法では後続する文の中に組み入れられているが、実際にはその文と統辭的な関係を持たない独立文であり、「(私ってなんと)不幸な(ことでしょう)！」「悲しい！」「苦しい！」といった一語からなる叫びになっている²¹。これらの形容詞文は、「私」に関係するものであるという点で意味論的に、また、一語あるいは数語からなり、他の文の前後だけではなく、文中に挿入することが可能であるという点で形態論的に、「私」への呼びかけと共通点を持つ。

「私」の状況を感嘆して言う形容詞文は、我々のコーパスの中では、先ほど「私」への呼びかけと鏡の関係にあると言った死者への呼びかけと同じように、男性の台詞には稀で女性の台詞に特徴的に多く見出される。我々のコーパスに見出される全ての例を下線を付して示したのが表4である。

¹⁷ 古フランス語の単語を本文で論じる際には、トブラ＝ロマチ古フランス語辞典の見出しに示されている形を採用している。

¹⁸ P. ズムトールが『ロランの歌』と初期の武勲詩5つから抽出した死者への呼びかけを見ると、呼びかけには繰り返しが無いのが標準であり、あってもほぼすべての例で1回のみである。(P. Zumthor, « Les *planctus* épiques », pp. 64, 65.)

¹⁹ ペルージ版 (éd. M. Perugi, *La vie de saint Alexis*, Genève : Droz, 2000) の78-99詩節ではアレクシスの死を巡って、父親、母親、妻の台詞が展開される。アレクシスの父の台詞(78-84詩節)では、「filz」か「filz Alexis」という呼びかけが84詩節を除く全ての詩節で一回ずつ現れる。母の台詞(87-93詩節)では、87 (« filz »), 88 (« belz filz »), 90 (« filz Alexis », « cher fiz »), 91 (« filz Alexis ») があり、90詩節では二回の出現が確認できる。妻の台詞(94-99詩節)では、94 (« sire »), 95 (« sire Alexis »), 96 (« kiers amis », « gentils hom »), 97 (« bele buce, bele vis, bele faiture »), 99 (« sire ») であり、96と97でそれぞれ二回、三回の呼びかけがある。特に97詩節に見られる死者の体の一部への呼びかけでもって死者その人への呼びかけとするメトニミーは、『テーベ物語』のIV-1(リギュルジュの王子)のイジフィールの台詞にも見出されるものである。

²⁰ 『テーベ物語』C写本のプランクトゥス中には、この他には「私」への呼びかけの例はない。

²¹ 「文としての統辭的独立」という観点から「形容詞文」について論じた川島浩一郎「フランス語の形容詞文について」、福岡大学研究部論集第5巻A：人文科学編第3号、2005、pp. 89-107を参照。なお、「lasse」については、「ああ」と訳される問投詞とも解釈しえるが、本論では、これも含めて「私」の状況を感嘆して言う形容詞文と呼ぶことにする。

表4

出現箇所	嘆き手	
v. 57 (*I-1)	ジョカスト	« Lasse, dolente, que ferai ?
v. 58 (*I-1)	ジョカスト	<u>Doulereuse</u> , que devendrai ?
v. 258 (II-2)	ジョカスト	<u>Lasse</u> , dist ele, <u>douloureuse</u> ! Or sui ge veuve sanz seignor, [...]
v. 2413 (IV-1)	イジフィール	<u>Lasse</u> , pour quoi le fis ?
v. 2513 (IV-2)	リギリユジュ王	<u>Ha ! las</u> , fet-il, com sui iriez !
v. 6076 (VI-9)	イスメヌ	<u>Maleüree</u> , com sui fole !

(下線は筆者による。)

「私」の状況を感嘆して言う形容詞文は、嘆きの対象の死、あるいは死すべき運命に直面した話者の心情に焦点をあてるという機能を持っていると考えられる。上にあげたジョカストの台詞の例は、わが子を殺すという夫に対して何もできない自分の境遇を嘆いたものである。話者の関心は一瞬わが子を離れて、「私はどうするのか?」「私はどうなるのか?」というわが身の心配に傾いているようだ。ジョカストがライウス王の不慮の死の知らせを聞いた場面 (II-2) で発せられる台詞では、中世の女性の社会的立場を反映してか、このような傾向が更に強まって表れている。

« Lasse, dist ele, doulereuse !
Or sui ge veuve sanz seignor,
si n'ai enfant qui gart m'anor.
[...] » (*Le Roman de Thèbes*, vv. 258-260)

(訳 「不幸なことです、」と彼女は言います。「悲しい。私は主のいない寡婦になりました。私の国を守ってくれる子供もおりません。[...]」)

ここでも、問題の形容詞文に導かれているのは、夫の死によってもたらされるであろう自分の境遇を嘆く台詞である。さらに、リギリユジュ王の王子の死の場面において、自分の過失から王子を死に至らしめたイジフィールの台詞 (IV-1) を見てみよう。

Lasse, dist el, pour quoi le fis ? (*Le Roman de Thèbes*, v. 2413)

(訳 「不幸なことです、」と彼女は言います。「どうしてあんなことをしたのでしょうか?」)

ここでも、形容詞文が導くのは、自分が目を離していたことを責める言葉であるが、子守女はリギリユジュ王が自分を罰するであろうことを恐れて、己を哀れだと言っているのである。

ここで問題にしている「私」の状況を述べる形容詞文は、「死者への呼びかけ」のモチーフの自他が転覆した形での表れであるが、この観点から言って、vv. 258-260の引用文はまた別の関心を引く。「私は寡婦になりました。」という台詞は、P. ズムツールが武勲詩のプランクトゥスから抽出した「現状の想起」のモチーフを裏返しにしたものである。「現状の想起」とはすなわち、プランクトゥスの始めにおかれた「遺体を見て」という「つなぎの語り」や、『『今いずこ』のトボス』のモチーフに呼応するような形で、『ロランの歌』209詩節の"Morz est mis niés, [...]"²² (「私の甥は死んでしまった[...]」) というような言葉が定型的に現れることであり²³、『テーベ物語』にも、VI-9 (アトンの死に対するイスメヌの嘆き) の台詞 (v. 6079, v. 6083) やVII-2 (ティデウスの死に対するポリニセスの嘆き) の台詞 (v. 6438) などに現われている²⁴。これらが死者の現状の想起なのに対して、「私は寡婦になりました。」は「私」の現状の想起であるといえる。

これと同様に、*I-1のジョカストの台詞の中の

Ha ! douce rien, mar te porté,
mar te norri, mar t'aleté !
Et tes peres mar t'engendra,
qui ocirre te conmanda ! (*Le Roman de Thèbes*, vv. 67-68)

(訳 ああ、おとなしい子よ、あなたを産み、育て、乳を与えたことが不幸のもとでした。)

²² *La Chanson de Roland*, op. cit., v. 2413.

²³ P. Zumthor, « Etude typologique des planctus... », p. 223.

²⁴ その他、v. 254 (II-2), v. 6006 (VI-8), v. 6037 (VI-8), v. 6102 (VI-9), v. 6430 (VII-2), v. 6487 (VII-2), v. 8855 (VIII-6) にこのモチーフが見られる。

及びに、IV-1で王子を悼むイジフィールの台詞の

Diex, fet ele, com mar fui nee ! (*Le Roman de Thèbes*, v. 2397)

(訳 神よ、と彼女は言います。生まれてきたことが不幸のもとでした。)

における"mar..."「...したことが仇となった(不幸のもとであった)」という言い回しは、P. ズムツールが「『(死者の美德が)仇^{あだ}になってしまった』というモチーフ」

(le motif de *mare fustes*)として武勲詩のプランクトゥスから抽出しているものの主語を二人称から一人称に置き換えたものである。P. ズムツールのいうモチーフは、例えば『ロランの歌』151詩節でオリヴィエの死を悼むロランの台詞に見出される" [...] tant mar fustes hardi !" ²⁵ (「[...]勇敢なことが仇になった」)のように、死者の運命を詠嘆するものである。『テーベ物語』でもVI-9(アトンの死に対するイスメヌスの嘆き)の台詞(v. 6080)やIX(カパネウスの死に対するアドラストゥス王の嘆き)の台詞(vv. 9643, 9644)に見出される。

ここまで女性の台詞から抽出してきた言い回しは、男性の登場人物の嘆きの中では、どのように現れているのだろうか。「私」の状況について述べる感嘆詩文は、上の表4が示す通り、リギリュジュ王の王子の死に対する嘆き(IV-2)に見られる、形容詞文としても感嘆詞としても解釈し得る"Ha ! las..." (v. 2513)一例があるのみである。「私」の現状の想起、「私」についての「~したことが仇となった(不幸のもとであった)」という言い回しは存在しない。この節で取り上げた言い回しは、『テーベ物語』C写本においては、「死者への呼びかけ」と共に、女性のディスクールを特徴付ける要素として意識されていると言って良いだろう。

「私」の状況を感嘆して言う形容詩文が女性の台詞を特徴づけるという現象もまた、古い伝統に属するものである。この傾向は『聖アレクシス伝』中のプランクトゥスにおいても確認できる²⁶。また、『ロランの歌』中の男性による服喪の嘆きの台詞にこのような形容詞文は一つもない。

P写本におけるポリニセスの嘆き

以上の調査は『テーベ物語』のC写本を対象に行ったものである。以下では、ある嘆きの台詞に見られるP写本のヴァリエントをとりあげて、検討することにした。『テーベ物語』の完本写本の特徴についてごく簡単に説明すると、これには「短い版」と呼ばれるC写本、B写本、S写本と「長い版」と呼ばれるA写本とP写本の二系統がある。すべての写本を検討して1890年に『テーベ物語』の最初の批評校訂版を出版したL. コンスタンは、「長い版」の方がオリジナルの姿を伝えるものであると述べたが、J.-Ch. ペヤンやP. エメによる1980年以降の研究では「短い版」の方が作品の原初の姿に近いという説が立てられている²⁷。近年の説に従えば、P写本のヴァリエントは、後世において「加筆」された部分であるということになるが、ここで「死者への呼びかけ」及びに前節で観察したモチーフがどのように現れているかを観察し、本論でここまで論じてきた現象にどのような変化が生じているかを指摘したい。

P写本のVII-2(ティデウスの死を巡るポリニセスの嘆き)においては、台詞の終わりから二行目、G. レイノー・ド・ラージュ版(C写本の校定本)で言うところの第6486行に続いて、70行の異文が挿入されている²⁸。ここには、12回の死者への呼びかけと7回の「私」の状況を感嘆して述べる形容詞文が存在する(表5)。

表5

P8564	<u>Amis, grans sens, grant compaignie,</u> Com somes por vous corecié !
P8589	<u>Amis compains, car m'entendés ;</u> <u>Amis compains, car m'aparlés :</u>
P8594	<u>Amis Tydeüs, car m'oïés :</u> [...]
P8615	<u>Amis compains, com nous laissiés</u> <u>Maris, dolens, desconsilliés !</u>
P8620	Nous portasmes nous compaignie : Ja, voir, par moi n'estra rompue, <u>Amis compains, mais bien tenue.</u> <u>Amis compains, compains amis !</u>

²⁵ *La Chanson de Roland*, v. 2027.

²⁶ ベルージュ版 (*op. cit.*) のアレクシスの父の台詞 (78-84 詩節) では、32 行中に一回 (79 詩節 « Alas pecables... ») であるのに対して、母の台詞 (87-93 詩節) では、88 詩節に一回 (v. 434 « E jo pechable... »)、89 詩節に三回 (v. 441 « E ! lasse, mezre... » と v. 444 « ..., dolente mal feüde ? »)。ただし、妻の台詞 (94-99 詩節) には一回も確認できない。

²⁷ J.-Ch. Payen, « La mise en roman de la matière antique : le cas du *Roman de Thèbes* », in *Études de philologie romane et d'histoire littéraire à Jules Horrent : offertes à l'occasion de son soixantième anniversaire*, Pub. de la Faculté de philologie et lettre de l'Université de Liège, 1980, pp. 325-332 ; A. Petit, *Naissances du roman*, *op. cit.*, t. II, « Appendice I », pp. 1085-1185.

²⁸ 以下の引用は、éd. L. Constans, *op. cit.*, t. 2, pp. 274, 275 から。ラハマン法に基づいたコンスタンの校訂には、現在の校訂ではありえない恣意的なテキストの改変があちこちでなされているが、e-codices (<http://www.e-codices.unifr.ch/fr/>) に公開されている写本 (Cognoy, Fondation Martin Bodmer, Cod. Bodmer 18) の画像ファイルを検証したところ、引用箇所にはそのような問題はなかった。

Caitis dolans, dolans caitis!

Amis, amis, jou muir por vous,

Por vous morrai tout a estrous.

Que faic, dolens ? las, ke ferai ?

(下線部は死者への呼びかけ、網かけ部は「私」の状況を感嘆して述べる形容詞文であることを示すものとする。)

C写本のこの台詞が59行中一回の死者への呼びかけしか含んでいないことは上に指摘した通りである。P写本のポリニセスの台詞には、ここで問題にしている異文を除けば、C写本と比べて12行の「欠落」と8行の「挿入」があるが、全体の内容には大きな異同がなく、呼びかけもC写本と同じく一回だけである。また、男性の台詞の中で死者への呼びかけが連呼されるというのは、C写本ではアトンの臣下たちによる集団的台詞の中に見出されたものの、これが42行のうち一か所のみ認められた(vv. 6009-6011)のに対して、P写本のヴァリエント70行のうちには三か所に連呼が認められる。さらに、「私」の状況を感嘆して述べる形容詞文に至っては、C写本においては男性の喪の台詞全体の中で一例だけだったが、P写本の異文の最後の18行には、三か所に分散して七回も現れている。以上の統計的な指摘により、P写本の異文にはC写本のテキストと比べて明らかな文体の違いがあるといえる。死者への呼びかけの連呼も「私」の状況を感嘆して述べる形容詞文も『テーベ物語』以前の作品には少ないことを考慮すれば、この異文が、オリジナルには含まれておらず、後世における加筆であることは明白だと言えよう。

作品のもとの状態を反映していると考えられる「短い版」におけるポリニセスの台詞においては、ティデウスが彼にとって"charniex amis"「血を分けたような友」(v. 6435)であり、兄であるエティオクレスによって奪われていた土地を取り返してあげると約束をして、大いに苦勞をしてくれたことが語られる。危険を顧みずにエティオクレスのもとに使者として行ってくれたこと、その帰り道に彼を待ち伏せしていた50人の騎士を倒したこと、戦いが始まると昼夜を問わずポリニセスのために尽くしてくれたことを語った後で、喧嘩に始まった出会いの場面を回想する件は、これまでの物語の展開を聴衆に回想させるという語りの上での役割を持つと共に、イスメヌによるその恋人アトンの死に対する嘆きの台詞と共に、この物語における抒情の極みの一つを形成している。

P写本の異文で、ポリニセスが死者に「友よ」「仲間よ」と何度も呼びかけ、自分の嘆きを「悲しい」と何度も直接的に表現しているのは、この抒情の強度を高めるためであったと考えられる。我々が論じてきたことに照らし合わせてこの現象について述べれば、『テーベ物語』C写本においては例外的であった「死者への呼びかけ」が、これもまた女性のディスクールに特徴的だった話者

自身の悲しみを表す形容詞文と共に付け足されているということになる。この現象に関する我々の考えを以下に提示して、結論とする。

文学史の大きな流れとして、それまでは武勲詩のような「歌」(古フランス語 chant)が中心であったのが、『テーベ物語』を嚆矢として宮廷趣味の「物語」(古フランス語 roman)が発展することになる。いちばん大きな変化の一つは、それまでは男性の登場人物の影に隠れて、舞台の端にしか立ち位置のなかった女性が物語の舞台の中央に登場するようになったことである。プランクトゥスの例でいえば、『ロランの歌』において恋人ロランの死を知るなりすぐに死んでしまうオードと、『テーベ物語』で恋人アトンを失った後に長大な喪の台詞を述べるイスメヌの対比はその例である。『テーベ物語』のオリジナルにおいては、嘆きの台詞に性差を設けるために、それまでの作品にもあった死者への呼びかけや感嘆を表す形容詞文の分布を女性の台詞に多く男性の台詞に少なく割り当てるという傾向を極端に大きくしており、この状態を反映しているのがC写本であると我々は考える。ところが、『テーベ物語』以降、恋愛における嘆きにまつわる台詞の発展と共に、ますます女性の台詞が物語の舞台の前面に出ることになり、男性の台詞にも影響を与えるに至った。12世紀後半以降の物語や抒情詩における男性の嘆きの台詞には形容詞文が頻出するようになる。P写本の異文は、このような『テーベ物語』以降の宮廷趣味を反映したディスクールの発展の影響を受けたものだと考えられる。

資料

『テーベ物語』(G. レイノー・ド・ラージュ版)のプランクトゥスで死者への呼びかけを含む文を以下に引用し、訳を示して、呼びかけに続く二人称を含む文に現れるモチーフを記す。

*I-1 (エディプスの運命を嘆くジョカストの台詞)

Por quel forfet et por quel tort,
petit enfes, receveras mort ? (vv. 63-64)

(訳 小さな息子よ、一体どのような罪や間違いがあって、死を賜ろうというのか?) — 息子の運命への嘆き、憤り

Ha ! douce rien, mar te porté,
mar te norri, mar t'aleüt ! (vv. 67-68)

(訳 ああ、おとなしい子よ、あなたを産み、育て、乳を与えたことが仇になりました) — 自分の運命への嘆き、憤り

Blasmé serons, filz, de ta mort,
ton pere a droit, et je a tort
Il t'a ocirre comandé,
biax tres chier filz, estre mon gré. (vv. 71-74)

(訳 息子よ、お前の死で責められることだろう。お前の父親は故あって、私は誤って。父親がお前を殺すように命じたのです。麗しくとても愛しき息子よ、私の意思に反して。) —自分が批難されるであろうことへの恐れと無実の訴え

IV-1 (リギルジュの王子の死を嘆くイジフィールの台詞)

Enfes, petite creature,
clere face, tendre feture,
tant fusses genz et avenanz
se peüsses avoir vinz anz ! (vv. 2417-2420)

(訳 幼子よ、小さきものよ、色白の顔、華奢な体よ、もしもあなたが二十歳になっていれば、とても優雅で魅力的な人になったことでしょうに。) —死者への遠まわしな賞賛

IV-6 (リギルジュの王子の死を嘆く王妃の台詞)

He ! petit enfes, tendre bouche,
pour vos au cuer grant deul me toche. (vv. 2547-2548)

(訳 ああ、小さな子よ、柔らかな唇よ、あなたのために大なる悲しみが私の心を痛めます。) —嘆き

VI-8 (アトンの死を嘆く臣下たち)

« Athes, sire, bele jouvente,
bele chiere, franche, rouvente,
biau douz sires, por coi es mors ?
Qui tendra mes les granz esfors ? (vv. 6009-6012)

(訳 アトンよ、美しい若者よ、美しく、気高く、バラ色のお顔よ、麗しく優しい殿よ、どうして亡くなってしまわれたのですか？ 今後は誰がこの大軍を率いるというのか？) —死者の遠まわしな賞賛

VI-9 (アトンの死を嘆くイスメース)

« Athes ! biau sire, tu ne m'oz !
Euvre tes eulz ! por coi les cloz ?
Ce est Ysmaine qui parole !
Maleüree, com sui fole ! (vv. 6073-6076)

(訳 アトンよ、麗しき殿よ、私の言うことが聞こえていませんね。目をあけて下さい。どうして閉じているの？ イスメースが話しているのですよ。不幸な私、どんなに気がおかしいことでしょう。) —自分の運命への嘆き

Mors es, Athes, ce est donmage !

Mar fu veü ton vasselage !
Avant tes jourz en es mors ci.
A l'ame face Deu merci ! (vv. 6079-6082)

(訳 あなたは死んでしまいました、アトンよ、残念なことです。あなたの勇気が^{あだ}仇になりました。そのせいで、寿命が来る前にここで亡くなってしまいました。あなたの魂に神が慈悲を賜りますように。) —祈り

Mors es, Athes, veraïement,

mout as tost usé ton jovent ! (vv. 6083-6084)

(訳 あなたは死んでしまった、アトンよ、本当に。あまりに早く生命を使い尽くしてしまったものです。) —嘆き

VII-2 (ティデウスの死を嘆くポリニセス)

Compainz, fet il, mout ert grant tors
s'après vous vif quant estes mors ;
[...]. (vv. 6429-6430)

(訳 「友よ、」と彼は言います。「あなたが死んでしまった後、私が生きていますとすれば、大きな間違いでしょう[...]」 —自分も死んでしまいたいという嘆き